

# 天地人

第12号 No.12

Oct 2010

ISSN 1882-3580



雲南省元陽地域、ハニ族の棚田の景観。雲南紅河流域の300kmあまりの谷では、異なる民族の現地住民が大規模な棚田をつくっており、人間による自然環境利用のモデルとなっている。 2008年4月鄭曉雲撮影

## Contents

「違い」を知ることこそ日中協力のカギ

天 児 慧 — 2

書評：包茂紅『中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力』

原 宗 子 — 4

雲南少数民族の水文化・水環境の変遷の研究：探索・成果・結論

鄭 曉 雲 — 6

第七回中国災害史国際学術シンポジウム参加報告

福 士 由 紀 — 8

雲南マラリア地域の変遷

周 瓊 — 10

1930年代台湾における水利開発とマラリア流行

顧 雅 文 — 12

中国における社会環境とエイズ・性病の流行状況

蔡 国 喜 — 14

お知らせ

— 16

了解“不同”才是日中合作的关键

天 児 慧 — 2

包茂宏《中国环境监督机构以及东北亚环境合作》书评提要

原 宗 子 — 4

云南少数民族水文化与水环境变迁研究：探索、成就和结论

郑 晓 云 — 6

参加第七届中国灾害史国际学术研讨会的体会

福 士 由 纪 — 8

雲南瘴氣區域的變遷

周 瓊 — 10

1930年代臺灣水利開發與瘧疾流行

顧 雅 文 — 12

中国的社会环境和艾滋病、性病的流行情况

蔡 国 喜 — 14

最新动向

— 16

Knowing the “difference” is the key to Sino-Japanese cooperation

AMAKO, Satoshi — 2

Book review: Bao, Maohong “Environmental Governance in China and Environmental Cooperation in Northeastern Asia”

HARA, Motoko — 4

Research on the Water Culture of Ethnic Minorities in Yunnan and Changes in Water Environment: Exploration, achievement, and outcomes

ZHENG, Xiaoyun — 6

A report on the 7th international symposium on Chinese Disaster History

FUKUSHI, Yuki — 8

Changes in malaria region of Yunnan

ZHOU, Qiong — 10

Water supply development and the malaria epidemic in Taiwan of the 1930s

KU, Ya-wen — 12

Social-environment and AIDS/STI epidemic in mainland China

CAI, Guoxi — 14

Currents

— 16

# 「違い」を知ることこそ日中協力のカギ

NIHU 現代中国地域研究 6 拠点連携プログラム 幹事長  
早稲田大学国際学術院 天児慧



この7月上旬、仕事で訪れた上海で運良く「万博」を見る機会を得た。帰国の時間に制約されて参観できたのは日本産業館と日本館、中国館などでしかなかった。しかしそれだけでも感じることは多く、私にとって意義深いものであった。その中でも特に、日本館と中国館の基本的なコンセプトがあまりにも対照的だったのは強烈な印象であった。日本館に入ると、まずは伝統的な絵画が日本の電子メーカーによるハイテク技術によって、ごく繊細な部分まで鮮やかに再現されて、まるで実物のように通路の両壁に映し出されている。また別の大きな部屋では日中友好のシンボル朱鷺を話題にしながら、山林、里山、田園の緑豊かな風景や、自然と人間の調和の美がスクリーンいっぱいに鮮やかに描き出されていた。ロボットのバイオリンリストが奏でる曲は人気のある中国の曲であった。静寂の中での気配りに、多くの中国人の心を惹きつけていた。

これに対して中国館では入場するといきなり8分ほどの映画を見せられた。正面に加えて左右がハの字型になった側面にも膨大なスクリーンがあった。映し出された内容は1978年以降の改革開放の躍動する様々な人々の姿で、これでもかというほどに次々と勇ましく登場してくる激しいものであった。その後最上階に行ったが、そこでは宋の時代の首都開封の庶民の生活が描かれた壁が絵巻物のよう続いていて、路上の人々、牛、馬が動いており、市場の人々にも動きがある。これもハイテク技術によってなされたものだった。全体として、日本の企画は“静の世界”、中国は“動の世界”である。

私はそう感じながら、同時にこうした質の違いはどこから来るのだろうかと考えた。確かに“勢いの差”と言えるかもしれないが、別の観点から見れば、日本はそうした「躍進の時代」を終え、まさに自然と人間、人間と人間が調和のとれた安定、安らぎを求める時代に入っており、中国はまだ「躍進の時代」のただなかにあると言えるのかもしれない。今日中国の指導部が掲げるようになった「和諧社会」「和解世界」の実現はまさに、次代を見据えた大きな目標なのである。

そのように見ていくなら、実は日中間の相互協力におけるある種の役割分担が浮かび上がってくるように思われる。つまり中国の、特に経済的な勢いは低迷する日本経済にとって関係の持ち方次第では再浮上のカギになる。これに対して日本が既にある程度実現しているハーモニー重視の社会の枠組みや取り組みなどは、中国が様々な矛盾や問題を抱えながら今後歩もうとする道にとって、大いなる参考と支援の可能性を内包している。



上海万博会場(2010年7月 村松伸撮影)

そもそも日本は長い歴史の中で無駄を最小限にしようとする節約、リサイクル、健康食といった生活の知恵が深く育てられてきた。今日、「成長の限界」や「持続可能な発展」が議論され、「発展こそ社会の進化」というテーゼが見直され始めている。したがって、日本の伝統的な生活文化は国際的にも再評価されてきている。そして実はそれ自体、必ずしも日本だけのオリジナルな考え方というわけではなく、広くアジア各地で育まれてきた文化にも見られるものである。ゆえに、アジアの伝統文化を掘り起こし再評価する作業は、

アジアの連帯のみならず、アジア発の「持続可能な発展」の新しいモデルを提示するカギになるかもしれない。中国自身が「経済大躍進」の中で生み出してきた深刻な矛盾の中で、「経済発展一辺倒」路線に疑義を抱き、自らの伝統文化を見直し始めている。欧米的な思考には無いアジア独特の思惟、深いものの考え方、哲学を改めて今日の枠組みの中で読み直し、再生する作業は、実は日本と中国が協働してこそできる重要な試みだと最近、痛感している私である。

## 了解“不同”才是日中合作的关键

NIHU 当代中国地区研究 6 基地联合项目 干事长  
早稻田大学国际学院 天儿慧

七月上旬有机会参观“上海世博会”。印象深刻的是日本馆与中国馆的基本理念表示鲜明的对照。用一句话总结日本是“静的世界”，中国是“动的世界”。这暗示日中之间互相合作的相互具备的条件。总之，中国的趋势对低潮

中的日本经济来说成为再次展露头角的关键。另一方面，日本已有和谐社会的框架，这将成为中国追求的“和谐社会”能够实现的参照。日中合作也许会成为创造亚洲的“可持续发展”新模型的关键。

## Knowing the “difference” is the key to Sino-Japanese cooperation

AMAKO, Satoshi

Director, Contemporary Chinese Area Studies, NIHU Program  
Faculty of International Research and Education, Waseda University

At the beginning of 2010 this year, I had the marvelous opportunity of visiting the “Shanghai Expo.” I was rather impressed to notice that the fundamental concepts of the Japan Pavilion and the China Pavilion were contrastive. If it could be explained in words, it could be said that Japan is “a world of stillness,” while China is “a world of movement.” The state of the mutual cooperation between Japan and China is suggested

in this description. That is, the Chinese vigor could serve as a key to a second leap taken by the ailing Japanese economy. On the other hand, the Japanese framework of a harmonious society would be greatly helpful for China to realize such a “harmonious society,” which China aims to adopt. Sino-Japanese cooperation may become a key for creating the new model of “sustainable development” in Asia.

## 書評：包茂紅『中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力』



流通経済大学 原宗子

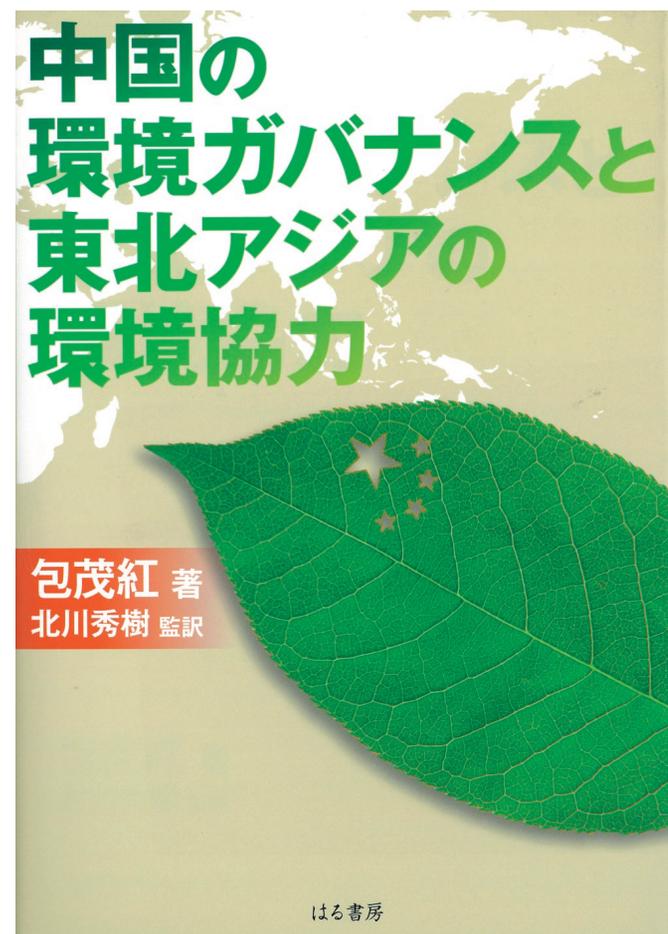
本書は、中国の環境史、とりわけ環境政策史の第一人者という気鋭の著者が、初めて日本語でその研究の集成を公にしたものであり、中国環境問題に関する知識といえば、とかく諸種の部分的現象の報道に依拠しがちな日本社会に向けて、その全体像を明示している点、極めて有意義な書であるといえよう。

紙幅の都合で以下章題のみ示せば：はしがき / 第1章 資源環境と中国歴史の歩み / 第2章 中国環境政策の変遷と成果 / 第3章 中国環境政策と環境ガバナンスの新展開 / 第4章 社会転換の中の中国環境 NGO / 第5章 西部大開発における生態建設—陝西省北部を中心に— / 第6章 グリーンオリンピックと北京 / 第7章 東北アジア地域の環境問題と環境協力 / 第8章 東北アジア環境文化の交流、の8章立てである。

第1章は、中国歴代の環境変遷を概観したもの。17世紀以降、西欧社会が石炭使用と植民地支配によって現代工業文明を開花させたのに対し、中国では、それまでを支えてきた農業中心の有機的経済では人口圧力を解消しえなくなり、近代における「衰え」を招いた、と見る。第2・3章は、従来、著者が各種の媒体に発表された論文の取り纏めで、元来、歴史学研究を素養とする著者が、現代環境問題についても歴史感覚を十全に発揮し分析する。即ち、人民共和国建国後のスターリンの自然観に影響を受け、環境問題の存在自体に眼を瞑った時代、1973年「改革開放」政策以降の、環境問題の存在を認め始めた時代、1998年からの現代、に区分し、政策と機構の変遷及びその問題点が概観される。ここでの特徴は、建国直後の諸政策が誤りだったと明白に認めている点、及び現在の政策・機構の問題点が、社会の成熟度と関連づけられ、政府内部の異なる組織間、或いは中央組織と地方組織の間の矛盾などが、赤裸々に報告されている点だろう。この観点は、次の第4章において環境 NGO の状況と課題とを報告する際にも踏襲される。第5章は、著者の出身地でもある陝西省の実地調査に基づき、西部大開発の具体的

進展状況と課題とを示す。第6章は、北京オリンピックを契機として展開された環境政策とその成果を分析する。第7章は、著者が“ロシア極東地域・モンゴル・朝鮮・韓国・日本・中国”と定義する「東北アジア」に共通する地域環境問題を列挙し解決策を探る。第8章は、日本・朝鮮・中国には歴史的に存在した共通する環境文化があり、それを基盤に共通する環境問題解決に向けて、「工業文明から生態文明への転換」を図る新環境文化を建設しうる、と論ずる。

以上、甚だ粗雑な紹介だが、著者の率直でひたむきな環境問題解決を願う姿勢は理解して戴けよう。今後への期待を若干述べれば、著者が現在の中国社会の枠組みを前提とせざるをえない事情は理解できるものの、例えば NGO について、完全な民間人運営組織



中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力

---

のほかに、政府が立ち上げたもの・学生団体・国際 NGO の在中機関の 4 種を挙げ、政府主導組織の存在にも、民間 NGO のリーダーが政府組織に招聘されることにも、“無いよりは益しだろう”といった評価を下しておいでのように読み取れる部分とか、西部大開発やオリンピックに際して出現した諸種の変化を、主に政府関係資料の数値を利用し分析する手法などが、現在の日本人読者に理解されにくいのでは、と懸念さ

れ、表現に今一段の工夫が望ましく思われた。また、著者の理論的枠組みが、主に M. エルヴィン氏など西欧環境学者の理論に負う面が多いことは、本書の優れた点でもあるのだが、第 1 章の 17 世紀以前の叙述内容に関連する環境関連の史実には、日本及び中国での専門家が明らかにした新成果も多いので、参照されてはいかがだろう。

ともあれ、一読に値する好著である。

---

## 包茂宏《中国环境监督机构以及东北亚洲环境合作》书评提要

流通经济大学 原 宗子

---

本书总括中国建国以来的环保政策、环保机构以及环保 NGO 的变迁和取得的成果。特别是探讨了西部大开发、北京奥林匹克运动会等活动，对环保政策起到了什么样的作

用的问题。另外，概观日本、朝鲜和中国的环境史，将其放在共同存在的环境文化背景之下，摸索东亚环境协力的可能性。

---

## Book review: Bao, Maohong“Environmental Governance in China and Environmental Cooperation in Northeastern Asia”

HARA, Motoko

Ryutsu Keizai University

---

This book describes the manner in which the national environmental policy, environmental governance, and environmental NGOs appeared, the manner in which they changed, and their achievements after the founding of the Chinese Republic. Particularly, the author validates the role of China's Great Western Development Strategy and the Beijing

Olympics in the environment policy. Additionally, through a survey of the environmental history of Japan, Korea, and China, the author has discussed the potential for environmental cooperation in East Asia, which might be based on their common environmental culture.

# 云南少数民族水文化与水环境变迁研究： 探索、成就和结论



云南省社会科学院 郑晓云

云南省是中国少数民族种类最多的一个省，同时也是中国地貌多样性、生态多样型、生物多样性最典型的一个省。云南省也是中国 and 东南亚诸多大江大河的发源地和水源区，如澜沧江（湄公河）、红河、怒江（萨尔温江）、长江、珠江等。因此云南特殊的地理环境和众多的少数民族的存在形成了云南丰富多彩的生态文化，也包括了由各民族关于水的观念及利用水、保护水、治理水环境的传统知识、社会行为规范、社会制度和相关的建设成就等构成的丰富多彩的水文化。

云南少数民族水文化的研究是从 20 世纪 90 年代中期后兴起的，在此之前很少为学者关注。从这时起开始，我开始关注少数民族水文化的研究，并且长期致力于这一个领域的研究探索、理论建设和推广工作。2003 年由我主持的《云南少数民族水文化与小康社会建设研究》作为云南省社会科学规划项目立项，成为第一个少数民族水文化研究的政府规划项目，这一个项目研究的展开为推动云南水文化研究向着更广泛的领域延伸奠定了基础。

这一个研究项目以及随后的研究主要内容包括以下几个方面：

1, 进行少数民族水文化的理论内涵研究。包括水文化的理论结构和内涵，少数民族水文化的结构等。由于水文化的研究在中国也是一个新的领域，因此对少数民族水文化的理论研究也是一个全新的探索，需要研究构建水文化的理论结构和内涵作为研究的基础，同时要研究少数民族水文化的结构。

2, 少数民族水文化在历史发展、社会生活和水的利用、保护中的功能。研究表明各民族都有关于对水的不同认识，利用水、保护水和改造适合于人类居住的水环境的传统知识、社会规范、习俗、社会行为模式以及利用水来改善自身的生存环境和生计建设。在水资源和水环境的保护、利用、治理过程中水文化多发挥着重要的功能。

3, 少数民族水文化的变迁。在当代社会环境中水文化发生了什么样的变化，这些变化对当代少数民族地区的水资源、水环境带来了什么样的后果，是项目研究的

重要内容，它直接关系到评价少数民族传统水文化的成效和价值。研究表明各个少数民族的传统水文化在当代的可持续发展中仍然扮演着重要的角色，传统水文化的丧失是今天很多地区水环境恶化的重要原因之一。

4, 水文化在当代可持续发展中的价值和应用。对少数民族水文化的研究除了在学术上看到其对各个民族的生存发展之间的关系以外，很重要的研究内容是要认识水文化在今天可持续发展中的价值，以及如何继续利用这笔宝贵的传统文化遗产，将少数民族的水文化和今天的水资源和水环境保护结合起来。

通过这一项目的研究以及相关的研究延伸活动，项目研究不仅在中国和国际上发表了一些研究成果，同时也推动了水文化研究在云南的发展和运用，扩大了水文化研究的影响力。一些主要的研究成果如《水文化与生态文明—云南水文化研究国际交流文集》（郑晓云著，云南教育出版社 2008 年出版。越南文版，越南世界出版社 2008 年出版）。《水文化与水环境保护研究文集》（熊晶、郑晓云主编，中国书籍出版社 2008 年出版）等。

在这个项目的研究基础上还有很多的研究拓展和延伸。例如 2005 年 12 月在云南主办了“水文化和水环境保护国际会议”。2008 年主办了“红河流域的民族文化与生态文明国际会议”，以及其他一些相关的小型水文化研讨会，推动了对水文化的深入研究并扩大了云南水文化研究在中国和世界上的影响。



西双版纳傣族的水井建筑

云南少数民族水文化研究项目的成果表明了少数民族的水文化研究在当代的可持续发展过程中有重要的价值。

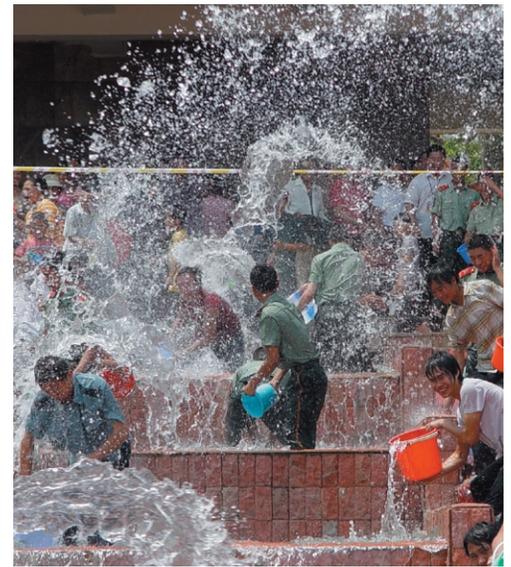
第一，有利于认识工业文明之前文化在水利用与管理过程中所起到的重要作用。通过对水文化的当代变迁过程的研究，我们可以得到的启发是水文化的丧失与当代的开发建设中造成的环境恶化和水问题有直接的因果关系。例如在今天的西双版纳傣族等民族中，由于传统水文化的丧失，导致了当地水环境直接或间接的恶化，当地民众关于水的传统观念及管理规范的退化成为了水环境不良变化的重要原因（郑晓云 2008）。因此在今天的发展中我们有必要深入研究、保护和继承各个少数民族传统水文化。

第二，文化是当代治理水环境、保护水资源、实现可持续发展的一个重要因素。因此在当代的水环境治理和保护中必须要重视文化的作用，重视利用少数民族传统水文化，同时结合当代的发展进行新的文化建设。离开了文化的因素，实现水的可持续利用将是十分困难的。但是今天面临的危机是随着社会的变迁很多少数民族的

传统水文化因子都在消失。

第三，云南少数民族水文化的研究对于认识，丰富全人类的水文化有积极的作用，提供了新的例证。它给我们更多的

启示是：在当代的发展建设中，在保护水资源和水环境、进行水环境建设、应对当代的水问题乃至气候变化的过程中，水文化都是一个不可被忽视的因素。今天有必要更加重视继承，建设和利用水文化。现在越来越多的学者对水文化研究有了研究兴趣，有了成果。



欢乐在水中——云南傣族的泼水节

## 雲南少数民族の水文化・水環境の変遷の研究：探索・成果・結論

雲南省社会科学院 鄭曉雲

「雲南少数民族の水文化の研究」プロジェクトの成果は、少数民族の水文化の研究が現代の持続可能な発展において重要な価値をもつことを明らかにしたことである。同時に本プロジェクトが示したのは、現代において、我々が水資源や水環境の保護、水問題については気候変動に直面するとき、水文化は無視することのできない要素であ

るということである。現代における水文化の変遷過程の研究を通じて、水文化の喪失と、開発に起因する環境悪化や水問題とが直接の因果関係をもつことがわかった。今日なお多くの少数民族が伝統的な水文化要素を消失させてつある。そのため、少数民族の水文化の研究とその成果の活用とを重視する必要がある。

## Research on the Water Culture of Ethnic Minorities in Yunnan and Changes in Water Environment: Exploration, achievement, and outcomes

ZHENG, Xiaoyun

Yunnan Academy of Sciences

The outcomes of the project on The Water Culture of Yunnan Ethnic Minorities shows that the water cultures of the ethnic minorities in Yunnan still plays an important role in current sustainable development. It informs us of the fact that water culture cannot be ignored when confronting a water crisis and in the treatment of water environment; therefore, water resources should be protected against climate changes. Further,

research shows that the emergence of the water crisis, along with the loss of the traditional water culture, is a consequence of the worsening in the water environment during development, and the ethnic minorities' water culture continues to be lost owing to the current social transformation. Therefore, future research should emphasize the adoption of the ethnic water cultures.

# 第七回中国災害史国際学術シンポジウム 参加報告



総合地球環境学研究所 福士由紀

2010年8月21日から22日、雲南大学において第七回中国災害史国際学術シンポジウムが開催された。シンポジウムのテーマは、「西南災害と社会変化」であり、中国、シンガポール、日本からおおよそ60名の研究者が参加した。

21日の開幕式は黙祷ではじまった。今年に入ってからだけでも、春先の干ばつ、夏の水害と、中国西南部は大規模な災害に見舞われた。黙祷は、これらの災害による死者にささげるものであった。

中国社会において、人々の様々な営為は災害の発生とどのように結びついていたのか、人々は災害をどのようにとらえてきたのか、災害やその被害に対して人々はどのように対処してきたのか。こうした問題を歴史的に考察し、現実の災害問題への対処の一助とすること、これが本シンポジウムの大きなテーマの一つであった。

開幕式以後、テーマ毎にセッションに分かれて個別研究報告と議論が行われた。各セッションは以下のとおりである。1) 環境災害史、2) 災害史文献史料研究、3) 環境疾病史、4) 西南災害と社会変化、5) 災害と救済。筆者

は、環境疾病史および災害と救済のセッションに参加した。

シンポジウム全体を通して、印象深かったのは以下の点である。

まず、「災害史」、「環境史」、「疾病史」は、歴史学研究としては比較的新しい研究分野だといえるが、若い世代の研究者が積極的にこの分野の研究を進めているという点である。セッションによっては、これら研究者間で激しい議論が交わされる場面もあり、互いに切磋琢磨し、この新たな分野の研究を深めていこうという雰囲気を感じられた。更に、シンポジウムには、歴史学研究者だけでなく、地質学、林学、水文学といった自然科学分野の研究者も多く参加しており、災害史という新たな

分野の文理融合的、学際的な発展への志向も感じられた。

また、多くの研究報告で、災害の種類やその規模、それがもたらした被害の程度といった所謂「過去の災害についての情報」だけでなく、人々の「日常」や「生活」と災害の関連性という災害社会史的テーマが設定されていたのも印象深かった。こうした研究では、各種関連史料の丹念な収集と読解、あるいはこれまで様々な研究者によって用いられてきた史料の新たな読み直しを通じて、災害発生前後の社会変化や、人々の災害に対する認識の変化などが生き生きと描きだされていた。

最後に、筆者自身の感想でもあり、閉幕式において李文海教授(中国人



開会式

民大学前学長)も指摘していたことではあるが、災害は世界各地において経験されてきたものであり、その意味で世界的共通性をもつ問

題であるといえる。今後、災害史の国際比較研究や国際共同研究を進め、災害に対する人類社会の様々な経験を汲みあげることは、学術

的意義をもつと同時に、今後も人類社会を襲うであろう各種の災害に対する「備え」としても重要であろう。

## 参加第七届中国灾害史国际学术研讨会的体会

综合地球环境学研究所 福土由纪

本文は参加 2010 年 8 月 21 日到 22 日在云南大学举行的第七届中国灾害史国际学术研讨会的报告。本年研讨会的主题是“西南灾荒与社会变迁”。与会的大约 60 名中国、新

加坡以及日本的学者就环境灾害史、灾害史文献研究、环境疾病史、西南灾害与社会变迁以及灾荒与赈济五个议题，进行了热烈的讨论。

## A report on the 7th international symposium on Chinese Disaster History

FUKUSHI, Yuki

RIHN

This article is a report on the 7th international symposium on Chinese Disaster History held from August 21 to August 22. The main topic of the symposium this year was “Disasters and Social Changes in Southwest China.” About sixty scholars from China, Singapore, and Japan passionately debated in the

five sessions on “Environmental disaster history,” “Research on historical materials of disaster history,” “History of diseases,” “Disasters and social changes of Southwest China,” and “Disaster and salvation.”



シンポジウム参加者たちの記念写真

# 雲南瘴氣區域的變遷



云南大学西南环境史研究所 周琼

瘴氣是對中國歷史進程產生重要影響的自然生態現象，在特殊的地理、氣候、生物群落等環境下形成，產生于偏僻、人煙稀少、氣候炎熱潮濕、地理結構封閉的山間盆地或河谷低地。生態環境原始，生物種群豐富，各生態要素尤其是含毒生物散發的有毒氣、液體間發生物理、生物或化學反應，產生危害人畜生理機能乃至生命的液體和氣體，就是瘴。

瘴分為氣體形式的瘴氣和水液體形式的瘴水，人感染瘴氣、瘴水後呈現出以瘧疾為主，包括多種病毒性、傳染性疾病的疾病群，就是瘴癘。史籍及習慣中的瘴氣實際是瘴氣和瘴水乃至瘴癘的合稱。

雲南是著名的瘴氣區，瘴氣的分布隨歷史發展及生態變遷逐漸變化。兩漢時期，主要分布在益州刺史部（南部）所屬的越巂、益州、犍為、牂柯、永昌等郡，及更遠的交趾刺史部、哀牢等地，滇池及洱海區域開發較早，瘴氣相對較為薄弱。“瘴”字產生于東漢中晚期，伏波將軍馬援征交趾是史籍中最早被認知的瘴氣。

蜀漢政權的南征是中原人士認識雲南瘴氣的第一個時期，南征將士所經的益州南部（庾降都督）所屬的越巂、雲南、建寧等郡的大部分地區，如瀘水、定笮、三絳、龍毋、青蛉、弄棟等地瘴水毒泉遍佈，瘴氣瘴霧繚繞。

魏晉南北朝時期，南中大姓成為勢力最強大的地方統治集團。曲州、靖州等統治中心區的瘴氣緩慢消退，瘴域逐漸縮減。雲南郡西部、永昌、興古等郡以邁立開江、恩梅開江、怒江、蘭滄江、元江（僕水）、盤龍江、金沙江流域為中心的七大流域區瘴氣濃烈，一直存在到 20 世紀六七十年代。

隋唐時期是中原人士認識雲南瘴氣的第二個重要時期，主要是因唐、詔間的天寶戰爭，

“調天下兵凡十萬討南詔，人聞雲南多瘴癘，行者愁怨……所在哭聲震野”。此期，農業、畜牧業、礦冶業得到了發展，瘴氣從人口集中、開發較多的滇池、洱海為中心的壩區盆地減弱和消退的速度加快。麗水、永昌、劍川、銀生、拓東等節度和通海、會川等都督府依然為瘴氣盤踞。

宋元時期，雲南得到了更廣泛的開發，瘴氣從滇池、洱海流域區的大理路、中慶路等中心區向山區半山區進一步退縮。大理金齒、八百、臨安廣西元江、銀沙羅甸、曲靖、烏撒烏蒙、羅羅斯等宣慰司和開南、廣南西路、麗江路等宣撫司轄區依舊是濃瘴區。中原對瘴氣的種類、分佈有了明確認識，有了青草瘴和黃茅瘴的名稱。

明代，中央王朝的控制得到了加強，記載雲南的史料有了極大增長，瘴氣認知區更為擴大、準確。移民增加、土著人口增長，玉米、馬鈴薯等高產作物在山区引種，許多瘴氣區漸成米糧之鄉，雲南、大理、姚安、楚雄、曲靖、澂江等府漸成無瘴區。孟養、木邦、車里等宣慰司，干崖、蓋達、隴川、芒市、南甸等宣撫司，灣甸、鎮康、永昌、蒙化、順寧、大侯、猛緬、孟定、孟



曾經瘴氣濃重的檳榔江谷地



云南山地开发

璉、孟良、威遠、元江、廣西、廣南、武定、北勝、麗江、裏麻等府州依舊是瘴氣之窟。

清代是中央王朝統治和開發更深入的時期，瘴氣的記載更廣泛、詳細，其分佈區與認知區基本一致。人煙

漸趨稠密，山地農業墾殖擴大，銅、鐵、金、銀、鹽等礦大量採冶，生態變遷加劇，致瘴生物減少或消失，瘴氣由壩區向山區、河谷區退縮，逐漸被分割成一個個獨立的小區域，交錯于深山河谷中。

## 雲南マラリア地域の変遷

雲南大学西南環境史研究所 周瓊

マラリアは特殊な地形・気候・生物群落などの環境で形成された自然現象である。雲南は有名なマラリア地域である。雲南では、マラリアの分布は歴史的発展と自然

環境の変遷にともない、開発が早く入り込んだ低地や盆地から山地や山腹に向かって徐々に縮小し、熱帯湿潤の河谷地域に集中してきた。

## Changes in malaria region of Yunnan

ZHOU, Qiong

Institute for South-eastern Environmental History, Yunnan University

Malaria is a natural phenomenon comprising special environments such as topography, climate, and organism clusters. Yunnan is a conspicuous malaria region. In Yunnan, the distribution of malaria is concentrated in the tropical humid river

basins, having contracted into the mountain regions and hillsides from the lowlands and basins where development has been rapid associated with historical developments and changes to the natural environment.

# 1930年代台湾における水利開発とマラリア流行



彰化師範大学歴史学研究所 顧雅文

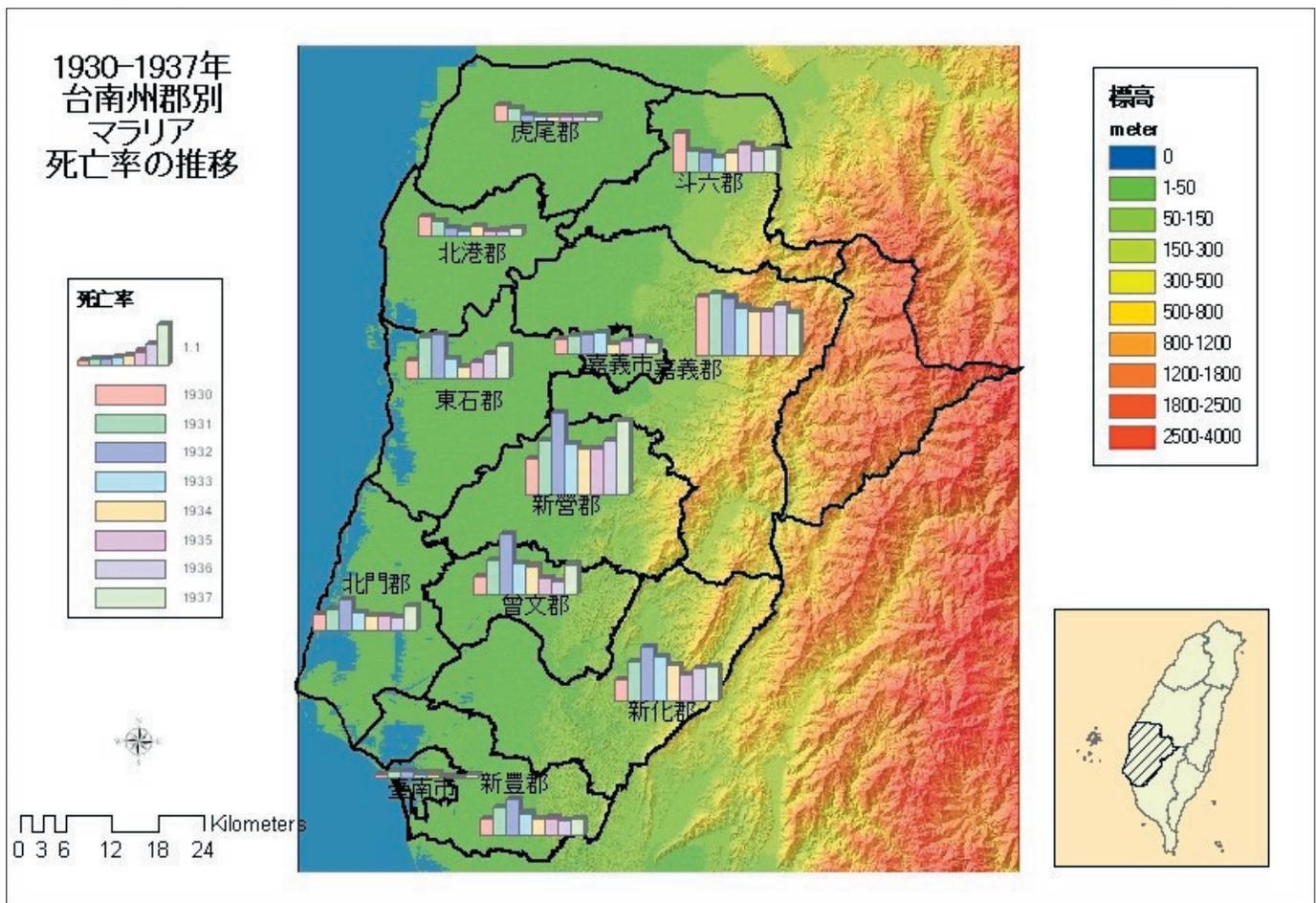
環境史研究は、人間が自然環境に拘束される側面のほかに、環境に作用し、それを変容させた面にも注目している。その作用が深化するにつれ、環境が動的な要因として人間社会に大きく跳ね返ってくる相互作用の究明は重要である。1970年代から提起されてきた「開発原病」(Developo-genic Disease) という概念によって、この因果関連を手際よく説明することができる。「開発原病」現象とは、開発に伴う人間活動の活発化や生態環境の変化が発生し、その副産物として疾病が異常発生する現象である。環境史の視点からみれば、

開発原病現象は、環境の変化が人間社会に跳ね返ってくる結果として扱われる。とりわけ、マラリアは蚊に媒介されるマラリア原虫の人間への寄生によって発生する媒介性伝染病であり、環境変化に敏感に反応するので、もともと「開発原病」としての性格が強いと考えられる。

植民地期に残された膨大な統計データの検討により、台湾では、マラリアによる死亡率は、本格的防遏対策が始まった1912年以来徐々に低下していたが、1930年代以後、死亡率と原虫率、罹患率には大きな乖離がみられる。特に、南部の台南

では、死亡率の低下傾向に反して、罹患状況の改善がみられず、マラリアの流行が再び激しくなったと示していた。実際、当時の台南州衛生課の報告書では、灌漑水路が完成してからの蚊の増加傾向という出来事が書かれ、水利開発による開発原病現象を示唆していた。

1918年日本国内に暴発した米騒動をきっかけとして、日本政府が台湾における米穀増産事業を真剣に推進し始めた。その結果、水利開発がより注目されることになった。「台湾水利組合令」が制定されたほか、広域にわたる大規模の水利システム



出所：顧雅文(2005)「植民地期台湾における開発とマラリア流行—作られた『悪環境』—」『社会経済史学』70巻5号、602頁。

を作る計画が立てられ、最大規模の嘉南大圳の開発が1921年から開始された。嘉南大圳工事の最も重要な部分は、二大導水幹線の開削及び、15万ヘクタールの農地の用水を確保する烏山頭ダムの築造であった。9年の工事期間中、マラリアに倒れた者が少なくなかった。これは、絶えず流入、流出する臨時の労働者は、或いは原虫の輸入者として感染源を持って集落に入り、或いは原虫の輸出者として他の集落に感染を拡大させたからである。

1930年、嘉南大圳が全面的に通水し、生態環境に計り知れない衝撃を与えた。まず、水田面積が2倍以上に増えた。多くの「看天田」が改良され、農業構造も陸稲、豆、甘藷などの雑穀から、水稻、砂糖

黍に変わった。更に、充分の水やりと肥料が必要であるジャポニカの栽培も可能になった。こうした環境の変化は、マラリアの流行と深い関係がある。水田と改良された耕地が増え、長期間湛水することも可能となり、故に蚊の繁殖を促すことになったし、特に稲田を好む *A. Sinensis* の生息密度を上昇させたと考えられる。稲の新品種の導入に付随した多量の施肥が、アノフェレスの幼虫の必須食物である微小植物の生長のための栄養分を供給することとなり、蚊の増殖にも貢献した。また、インディカに比べて、ジャポニカは短稈で耐倒伏性が高いので、水面への日照が良くなり、*A. Minimus* のような好日性蚊の産卵および幼虫の生育を助長した一方、大圳の厳格な

配水管理のもとで常に清水が流入した灌漑溝渠も格好の繁殖地を作り出した。媒介蚊の卵が水路によって運ばれ、蚊の繁殖地を拡大させた可能性も指摘できる。

1930年から台南州各郡のマラリア死亡率を示したように(図1)、死亡率の一時上昇が明確であった地域は、当時の灌漑改良地域とほぼ一致している。また、1931年から台南病院のマラリア患者が明らかに増加し、患者発生ピーク期も二山型になった。罹患、死亡統計の総合的検討から、植民地期台湾における水利開発とマラリアの因果関係は決して弱くはなかったと考えることができよう。

---

## 1930年代臺灣水利開發與瘧疾流行

彰化師範大學歷史學研究所 顧雅文

---

1970年代以來做為批判殖民近代化的一環而興起的「開發原病論 (Developo-genic Disease)」為疾病的環境史觀點提供了相當好的切入角度。大規模的開發活動帶來了集團性的人口移動，亦改變了原本的生態條件，由此打破

了人與病原體的平衡關係。日治時期的台灣，瘧疾死亡率雖穩定下降，罹患率卻在1930年代再次昇高，尤其台灣南部較為明顯，原因之一很可能與嘉南大圳的開發與通水造成的社會、生態變化密切相關。

---

## Water supply development and the malaria epidemic in Taiwan of the 1930s

KU, Ya-wen

Graduate Institute of History, Changhua University of Education

---

After the 1970's, research on "Developo-genic Disease" has been proposed as part of the criticism of colonization and modernization, and it provides a good perspective on the study of the environmental history of disease. A large-scale developmental activity destroyed the equilibrium between the human and the pathogen because it led to mass migration and modified the original environmental condition. The death rate from malaria gradually

decreased in Taiwan under the Japanese rule. On the contrary, there has been an increase in the rate of those who contracted the disease since the 1930's. This tendency was especially significant in the southern part of Taiwan. This is probably related to the social and ecological changes caused by both the development of the Jianan Irrigation Canal and its water supply.

# 中国における社会環境とエイズ・性病の流行状況



総合地球環境学研究所 蔡国喜

1985年中国において初めてHIV(エイズウイルス)感染が報告された。今日、感染は全国に広がっている。エイズの流行は3つの段階に分けられている。

第1段階(1985-1988年)は輸入期と呼ばれ、患者は主に中国に滞在している外国人や海外から帰国した中国国民であった。分布区域は沿岸部の都市が中心になっていた。この時期は、エイズに対する積極的な予防対策をほとんど行わなかったため、広範囲のエイズの流行を阻止するタイミングを逃した。また、HIV感染者やエイズ患者の人数は他の感染症と比べ極めて少ないので、行政においても重視されていなかった。

第2段階(1989-1993年)は拡散期である。主な患者は麻薬常習者であった。分布区域は中国西南部の雲南省が中心であった。雲南省の境界部はミャンマーやラオスなどの麻薬の生産・密輸地域と接している。この地域における麻薬使用者の人数は非常に高いと推測されており、不衛生な

注射針の使用や麻薬中毒者の性的接触が主要な感染経路となっていた。

第3段階(1994-現在)は増加期と呼ばれ、HIV感染者の人数が最も増えている。中国大陸の行政区域のうち31区域から、エイズの症例が報告されている。

HIV感染者の人数は毎年増加する傾向がみられ、特に2000年から、HIV感染者とエイズ患者の人数は激増し、2004年にピークになり、前年度の倍以上となった。その後、報告例は高い水準で維持していたが、増加する傾向は見られなかった。2007年のデータによると、中国において、報告されたHIV感染者は39866名であり、報告されたエイズ患者は8539名であった。

地域分布に着目すると、雲南省、広西省、河南省からのHIV感染者数が一番多く、それぞれ10000名を超えている。その次は新疆ウイグル自治区と広東省であり、5000名以上、10000名以下となっている。一方、チベット自治区、内モンゴル自

治区と青海省では、HIV感染者が最も少ない。交通が不便で経済が遅れているため人口の流動が少ないことが、重要な原因であると考えられている。国境のある地域や経済発展が進んでいる沿岸部で、HIV感染者数は他の地域より明らかに多くなっている。

ところで、感染対策のため、HIVの感染経路を解明することは、非常に重要である。中国では、5つの特徴的なHIV伝播経路が確認された。その内、麻薬の使用による感染者は累計(1985～2005年)で最も多く、39.3%を占めている。同性愛と異性間の性的接触による感染者は合わせて9.2%となっているが、経済発展とともに、急激な上昇傾向が予測される。例えば、雲南省、広西省において、麻薬の使用と売春が最も主要な伝播経路となっている。また、2006年から性的接触による感染率(同性愛者による感染も含む)が全国で顕著に増加し、2007年には麻薬の使用による感染率を上回った。



中国国内の1.5億と言われる流動人口の医療保障、社会保障は国内の大きな社会問題になってきている。農村部から昆明市のある建築現場に出稼ぎにきた流動人口の一人は、重い病気を患いながらも医療保障がないため病院に行けない。



中国では改革開放、社会発展に伴い、性産業も非常に盛んになってきた。散髪屋という名目で、実は売春宿になっているところが街の中で目立つ。彼女たちの多くは地方或いは農村部から都市部に入った流動人口である。

また、売血と血液製品の汚染による感染は合計で全体の24.5%になり、河南省におけるエイズの流行の主要な原因となっている。

上海において、2006年11月までの累計したHIV感染者の人数は2216名で、その内、エイズ患者は219名であり、エイズによる死亡者数は97名であった。新たに発見された感染者数は621名であり、その内の46名はすでにエイズを発症していた。621名中、エイズによる死亡者数は14名であった。上海は人口の流動が最もはげしい都市であり、性的接触による感染が主要なHIV伝播経路と考えられる。このため、麻薬使用者や性的産業の従事者あるいは同性愛者といった感染危険度の高い人々(以下、high risk group)から一般住民へ拡散する恐れは極めて高いと思われる。

最後に、中国は世界最大の発展途上国である。一旦、中国において、エイズがパンデミックになれ

ば、中国だけではなく、世界的な危機になるかもしれないと言われている。現在中国におけるエイズの罹患率はまだ比較的到低いレベルに留まっているが、総人口という分母が大きいと、決して油断することは出来ない。従来、エイズは主に麻薬使用者や性的産業の従事者あるいは同性愛者で流行していたが、近年はこのようなhigh risk groupから一般の人々に移行する傾向が見られる。

経済開発の副作用と言われる地域間及び都市部と農村部における格差が広がっていることにより、経済の改善を求める大量の農村部からの人口が故郷を離れ、東部あるいは都市部に入り、大規模に移動している。農村から都市への人口移動により、急速な都市化が進む一方で、治安や健康衛生上の問題も生じている。農村からの出稼ぎ労働者(以下、外来人口)は学歴の低下や専門知識の不足などが原因となり、就職

先の選択肢が非常に少ない。男性の場合、大多数が建築業や工場などの体力仕事に従事する。女性、特に若い女性の場合は、それに加え、ナイトクラブやマッサージなど娯楽業で働き、極端な例として性産業に従事する人も少なくない。また、中国に特有な戸籍政策により、外来人口は本籍地以外の地方で健康保険や年金制度などが適用されない。

このような外来人口は経済的に弱い立場であるため、性感染症(STI)やエイズを含む多数の感染症に感染しやすいhigh risk groupになっていると指摘できる。中国流動人口登録制度により、新しい外来人口は暫住所在地の公安部門に登録する義務があるとされているが、実際に登録する人はほんの一部でしかない。従って、都市における外来人口の現状を把握するのは非常に困難であるが、エイズ流行の対策においては、現状解明が重要と考えられる。

## 中国的社会环境和艾滋病、性病的流行情况

综合地球环境学研究所 蔡国喜

中国是世界上人口最多的国家，占世界总人口的五分之一，1978年以来随着改革开放的不断深入发生了急速的社会变化，取得了举世瞩目的文化和经济的高速发展。但是不可避免的是，一些新的社会问题的出现或者一些老的社会问题的激化。其中艾滋病/性病流行问题在新兴感染性疾病，公共卫生及国际保

健领域尤其值得关注。虽然现在艾滋病/性病流行还只是集聚在高危人群(high-risk group)之间，但是导致这些新兴感染性疾病从高危人群(流动人口、性工作者、吸毒人群、男男同性恋者等)向普通人群传播流行的社会因素广泛存在。改变这些社会环境的有效干预措施势在必行。

## Social-environment and AIDS/STI epidemic in mainland China

CAI, Guoxi

RIHN

China had 700,000 people who were HIV positive and 85,000 AIDS patients until 2007; the spread of HIV/AIDS in China has been a matter of concern. Yunnan province has had the highest number of cases (40,000-60,000) of HIV-1 infections, but with time, the characteristics of HIV/AIDS infection have undergone a change. China's CDC, multiple international organizations and global funds, local NGOs, and research institutes face many difficulties

in preventing the spread of HIV/AIDS in high risk populations. The high risk populations include intravenous drug users, female sex workers, youth, and migrants; the risk factors include cultural differences that are difficult to cope with, stigma, social beliefs, abuse, and health promotion consciousness. HIV/AIDS prevention faces multiple difficulties among high risk populations. Future studies should examine effective interventions in this regard.

2010年11月2日(火)に中国昆明市で国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」を開催します。

主催：日本総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点、中国雲南大学民族研究院  
共催：雲南大学生態環境人類学研究中心、雲南大学西南中国環境史研究中心、雲南省健康と発展研究会  
後援：在重慶日本総領事館  
会場：雲南大学科学館2楼報告庁  
言語：日本語と中国語(同時通訳)

8:30-8:50 開会式

司会：尹紹亭(雲南大学生態環境人類学研究中心・主任)  
挨拶(中国側)：何明(雲南大学民族研究院・院長)  
(日本側)：立本成文(総合地球環境学研究所・所長)

8:50-10:10 第一部 歴史

司会：林超民(雲南大学歴史系・教授)  
周瓊(雲南大学歴史系・教授)「疾病史における熱帯熱マラリアー雲南の熱帯熱マラリア地域を中心に」  
飯島渉(青山学院大学文学部・教授)「住血吸虫 vs 人ー歴史と現在の対話」  
コメント 李玉尚(上海交通大学歴史系・教授)  
コメント 小林潤(国立国際医療研究センター国際協力部・医師)

10:35-11:55 第二部 健康

司会：門司和彦(総合地球環境学研究所・教授)  
張開寧(雲南省健康と発展研究会・理事長)「困惑と希望ー農民工の健康に関する初歩的考察」  
渡辺知保(東京大学大学院医学系研究科・教授)「アジア・オセアニアの生業転換と環境・健康ーENVRERA studyから」  
コメント 曹叔翹(雲南省疾病預防控制中心専門委員会・委員)  
コメント 川端善一郎(総合地球環境学研究所・教授)

13:30-14:50 第三部 生業

司会：秋道智彌(総合地球環境学研究所・副所長/教授)  
馬琳煒(雲南大学民族研究院・教授)「国家力量、民族認識と市場経済ー中国ラオス国境地区二つのハニ族村におけるゴム栽培の人類学考察」  
Nathan Badenoch(京都大学東南アジア研究所・特任准教授)「村レベルの開発ガバナンスー中国・ラオス国境地帯で地域市場経済へ統合していくモン族のゴム栽培村の事例から」  
コメント 楊庭碩(吉首大学人類学と民族学研究所・教授)  
コメント 蒋宏伟(総合地球環境学研究所・研究員)

14:50-15:20 ポスターセッション

司会：袁鼎生(广西民族大学・副学長/教授)

15:35-17:00 総合討論

座長：門司和彦(総合地球環境学研究所・教授)、曾少聰(アモイ大学人類学系・主任/教授)

17:00- 閉会式

日本側代表会議総括：窪田順平(中国環境問題研究拠点・代表/総合地球環境学研究所・准教授)  
中国側挨拶：李志農(雲南大学民族研究院・副院長/教授)

2010年11月2日,我们将在中国昆明市与云南大学共同主办《中国西南的开发与环境、生计、健康》国际学术研讨会。

主办：日本综合地球环境学研究所中国环境问题研究基地、中国云南大学民族研究院  
协办：云南大学生态环境人类学研究中心，云南大学西南中国环境史研究中心，云南省健康与发展研究会  
后援：日本国驻重庆总领事馆  
会场：云南大学科学馆2楼报告厅  
语言：中日同声传译

8:30-8:50 开幕式

主持人：尹绍亭(云南大学生态环境人类学研究中心・主任)  
中方领导致辞：何明(云南大学民族研究院・院长)  
日方领导致辞：立本成文(综合地球环境学研究所・所长)

8:50-10:10 第一论坛:历史

主持人：林超民(云南大学历史系・教授)  
中方报告人：周琼(云南大学历史系・教授)：《疾病史视野下的瘧与疟ー以云南瘧疾区为中心》  
日方报告人：饭岛涉(青山学院大学文学部・教授)：《住血吸虫 vs 人类ー历史和现在的对话》  
中方评论人：李玉尚(上海交通大学历史系・教授)  
日方评论人：小林润(日本国立国际医疗研究中心国际协力部・医师)

10:35-11:45 第二论坛:健康

主持人：門司和彦(総合地球環境学研究所)  
中方报告人：張開寧(雲南省健康と発展研究会・理事長)《困惑と希望ー農民工職業健康的初歩研究》  
日方报告人：渡辺知保(東京大学大学院医学系研究科・教授)：《亚洲大洋洲的生計轉換と環境、健康ー来自ENVRERA study》  
中方评论人：曹叔翹(雲南省疾病預防控制中心專家委員會・委員)  
日方评论人：川端善一郎(総合地球環境学研究所・教授)

13:30-14:50 第三论坛:生计

主持人：秋道智彌(総合地球環境学研究所・副所長、教授)  
中方报告人：馬琳煒(雲南大学民族研究院・教授)：《国家力量、民族认同与市场经济ー中老边境两个哈尼族(阿卡人)村寨橡胶种植的人类学考察》  
日方报告人：Nathan Badenoch(京都大学东南亚研究所・特任准教授)：《村级级别的开发管理ー在中国、老挝的国界地带，向地区市场经济統合的汶族橡胶栽培村的事例》  
中方评论人：楊庭碩(吉首大学人類学と民族学研究所・教授)  
日方评论人：蒋宏伟(総合地球環境学研究所・研究員)

14:50-15:20 海报发表

主持人：袁鼎生(广西民族大学・副校长、教授)

15:35-17:00 综合讨论

中方主持人：曾少聰(厦門大学人類学系・主任、教授)  
日方主持人：門司和彦(総合地球環境学研究所・教授)

17:00- 閉幕式

日方领导做会议总结：窪田順平(総合地球環境学研究所 中国環境問題研究拠点・代表)  
中方领导致闭幕辞：李志農(雲南大学民族研究院・副院长、教授)

発行日 2010年10月25日

編集・発行

中国環境問題研究拠点

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

総合地球環境学研究所

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/

製作・勉誠出版

Date of Issue 25 Oct, 2010

Edited and Published by

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto 603-8047 Japan

Research Institute for Humanity and Nature

TEL: +81-75-707-2462 FAX: +81-75-707-2513

http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.